

東北 VALUE SIGHT

山形



特定非営利活動法人えき・まちネットこまつ
理事長

江本 一男 (えもと・かずお)

1953年生まれ。
山形県川西町出身。農業高校実習教諭
地元、置賜農業高校に奉職する傍ら、公益や環境学習
を進め、総理大臣賞ならびに文部科学、環境大臣賞な
ど受賞生徒の指導を担当。2012年早期退職し、任意団
体えき・まちネットこまつの法人化に奔走。2014年か
ら再任用として現職に戻りながら、休日はほとんどボ
ランティアとしてNPO法人の運営やまちづくりに取
り組む。

特定非営利活動法人えき・まちネットこまつ
東置賜郡川西町大字上小松1644番地
<http://www5.omn.ne.jp/eki-mn-7/>

全国でも珍しい地元住民が運営する町民駅・羽前小松駅。この管理運営を行っている「特定非営利活動法人 えき・まちネットこまつ」は、駅を拠点としたまちづくりに取り組んでいる。現在では、地元農業高校との連携事業、各種イベントの開催、新施設の開設など、その活動は多岐にわたっている。

羽前小松駅の利活用促進のために始まった活動は子どもや高校生に高齢者といった多世代の融合、農村と都会を結ぶ、地域を越えた交流など、活気あるまちづくりへと広がりを見せている。

多世代融合の活動を通して、 担い手育成に挑戦するまちづくり

高校生と共にスタートした公益活動

山形県南部の川西町にある「特定非営利活動法人(以下、NPO法人) えき・まちネットこまつ」は、2010年2月、JR東日本の米坂線にある羽前小松駅(以下、小松駅)を中心にしたまちづくりを目的に任意団体として産声をあげた。しかし、真のスタートは4年前にあった。

小松駅は1982年に、当時の国鉄から無人駅を宣告されたが「有人駅を残そう!」という住民運動が起きて、町が運営費を助成する町民駅として生まれ変わった。ところが、沿線地域の人口減などが影響して利用客が減り続け、販売手数料収入が激減したため、町の負担が増え、2005年に町民駅の廃止計画が明らかになった。

この課題に反応したのが、地元置賜農業高校(以下、置農)「えき・まち活性化プロジェクト」の女子生徒12名であった。「町民駅の廃止は小松駅の無人化につながり、通学生や老人など交通弱者の切り捨てを生む」こう判断した彼女たちは、有人駅の存続を訴え、利活用を促進する活動を2006年4月に開始した。この取り組みは、代々受け継がれると共に本法人名称の原型にもなった。その後、この活動は住民を巻き込み任意団体設立に至り、2014年1月に念願の法人化を実現した。

ローカル駅の存在価値を高めた、 高校生と住民のコラボレーション

公共交通機関としてのローカル駅は、人口減少や乗車券のネット購入、そしてSUICAなど電子決済の普及によって存在価値を失っていく。小松駅の将来像に危惧を感じた私たちは「駅をまちづくりやコミュニティの拠点にする取り組みによって、有人駅としての存在価値は高まる」と判断し、2010年以降、駅周辺を中心とした市街地活性化事業を展開した。その間多数の置農生が関与し、それをリードしサポートする住民とのコラボレーションが進んだ。

主な活動を列挙してみよう。1つは、置農生が毎週土曜日に仮設テントで開催する駅前アンテナショップ。自分たちが育て作った農畜産物や加工品を販売しながら、有人駅存続や利活用促進を訴え続けた。この活動は2012年、駅前通りの空き店舗をリノベーションした高校生と若者の店にグロウアップした。2つ目は、駅前イベントの開催。駅舎を利用した歌声喫茶、子どもの日フェスティバル、夏から秋のサンセットコンサート&ナイトバザール、駅前通り歩行者天国や駅前イルミネーション、雪まつりなど、四季を通した駅周辺の集いの場創造は広がった。3つ目は、駅前通りにある3階建ての空き店舗をリニューアルした交流プラザの開設と、伝統の料理や技能、舞踊や語りなど地域文化伝承講座である。次世代育成を目的に、高齢者など大人世代ばかりでなく、置農生までもが講師となった持続可能な人材育成の取り組みが続いた。

この他にも、観光案内やまちなか巡りなど、ローカル駅の存在価値を高めるため、多世代が連携し合う取り組みが拡大した。



駅前イベント「子どもの日フェスティバル」

多世代融合の活動が、地域を愛する 担い手を育成し、元気なまちが芽吹く

置農生が種をまき、多世代の住民が協力し合って育てたまちづくりの芽は、さまざまな花を咲かせ、実を結ぼうとしている。

伝承講座の「舞踊」から発展した小中学生の子ども観光大使「ラダリア」は、小松地区交流センターのバックアップも受け、町の紹介やテーマソングの歌とダンスなどを披露し、年間20回を超える公演やイベントを展開するチームに育った。「町の花ダリアを愛する」という意味を込めたゆるキャラ的存在として、町民に元気を発信している。

同じ伝承講座の「地域料理」受講生が結成した置農豆ガールズは、地元の伝統野菜でもある赤い大豆「紅大豆」の商品開発に取り組み、紅大豆と米沢牛入りのキーマカレーを完成させ、全国賞を受賞した。さらに、小中学生に豆文化を普及するため、豆を使った食育活動を開始し、手作り教材やその手法が町内外で話題になっている。

置農生のチャレンジショップは、豆の駅という名称で県内外に開店。東京都浅草や杉並区など5店舗での販売もスタートした。また、この店舗を中心に募集した「えき・まちファンクラブ」の会員は首都圏を中心に800名を超し、毎年秋に開催されるファンクラブ交流は「農都交流」という名称で人気を呼んでいる。昨年は、マレーシア国際交流とのジョイント企画として、40名もの参加者で盛り上がった。今年も、稲刈りや芋掘りなどの農業体験や、餅つき、芋煮会など川西町ならではの交流会が開催され、参加者と高校生や住民との交流が行われた。この他に、若者の生業づくりを目指しながら若者の定住促進に挑む起業塾や、大人世代が町の宝を次世代に伝えるまち暮らし講座も開催することで、多世代融合は定

着し、さまざまな活動に若者が参加する元気なまちが芽吹いてきた。

できない理由を言う前に行動を起こし、 担い手づくりに挑戦

地方の農村地帯では人口減少や高齢化が進み、元気を失っているところが少なくない。その理由に「ここには自慢できるものがない、仕事がない、金がない、やる人がいない」等々を並べ、他力本願的に批評や批判を繰り返す大人も多い。しかし、担い手である青少年も含めた若者にとって、そのような大人の姿は魅力的なのか、住んでみたい土地なのか、と自問すれば否であろう。

昨年からは、U・Jターンの青年たちが中心になって「んめもんプロレス」という地域おこしイベントが駅周辺で開催され、本法人も共催しながら好評を博した。彼らのコンセプトは「子どもに見せたいパッションとアクション」である。私たちが生まれ育った町や地域に誇りや自信を持ち、次世代に誇れる情熱を携え、できない理由を言う前にまず行動を起こし、担い手づくりに挑戦していきたい。



農村と都会の交流 稲刈り体験